

図書館における電子書籍の 導入実態と課題

電子書籍図書館推進協議会代表
秋田県立図書館副館長 山崎博樹

公立図書館のサービス課題

1963年

- ・「中小レポート」 市町村図書館の振興

1970年

- ・「市民の図書館」 貸出、全域、児童

1990年

- ・課題解決支援 ビジネス支援、生活支援

1995年

- ・IT活用

公立図書館の状況

図書館数	3, 214館(74, 6%)	915館
職員数	11, 579人(司書52%)	6,080人
資料費	約292億円	24億円
貸出冊数	69,600万点	3200万点
レファレンス件数	年間100万件程度	
	(公立図書館23年度:青1972年)	

公立図書館の課題

- 自治体の財政難
- 職員の非常勤化
- インターネットの登場と活用(1998年)
- 課題解決支援サービスの進展
- 指定管理者の導入(2003年)
- 公貸権
- 電子書籍、デジタルアーカイブの登場

電子書籍とは？

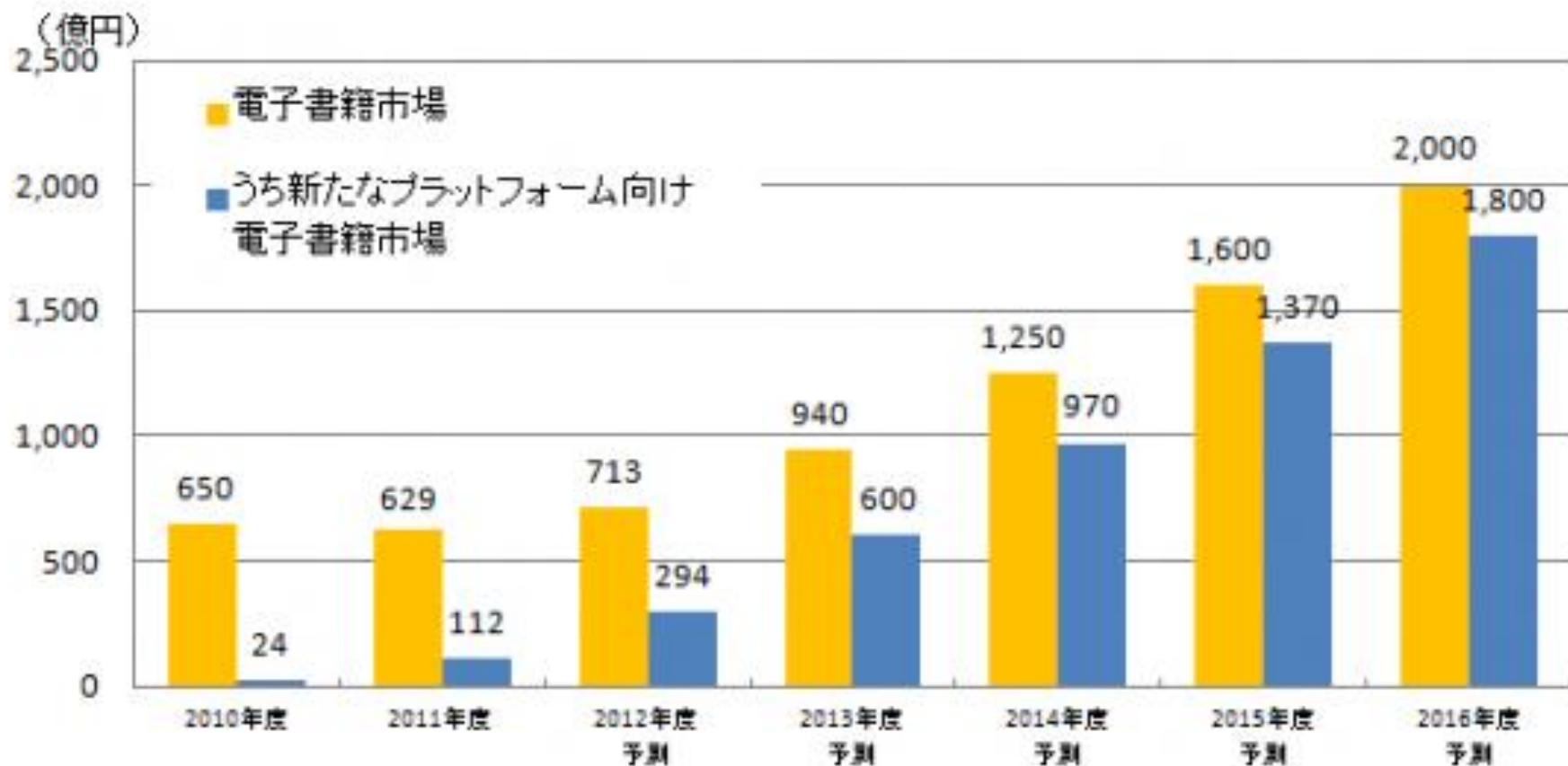
定義

■音声、動画を磁性体等の素材に、電磁的、または、レーザー光等で記録した情報や、ネットワークで流通させた情報を指す。

過去には(1990年～)

■電子ブック、デジタル書籍、デジタルブック、Eブック、オンライン書籍等と呼ばれていた。

電子書籍の利用と予測



* パソコン、携帯電話からタブレット端末への利用に変移

電子書籍の背景

■背景として

リアル書店の減少 2万1千店 → 1万5千店
(2001) (2011)

売り上げの減少 1兆1千億円→ 8千2百億円

電子書籍の活用

- 商業電子書籍の購入
- 自館資料の電子書籍化
- DRMの導入
- クラウド型かインハウス型か
- 電子書籍の認証サーバの導入

電子書籍のメリット・デメリット

■メリット

- 書店や図書館に直接行く必要がない。
- 24時間いつでも利用できる。
- 文字や画像を拡大することができる。
- 読み上げソフトで視覚障害者にも対応
- 絶版本の再販が可能になる。

■デメリット

- パソコンやタブレット等の端末を用意する必要がある。
- ネット環境がないと使えない。
- 提供されている本の種類が少ない。
- 相互貸借ができない。
- 資料の保存ができない。

参考 電子書籍の形式は

- ダウンロード型(1度にすべて)

- ストリーミング型(見る部分毎に)

- リフロー型、フィックス型

- ファイル形式

 - PDF、 EPUB(国際規格)、

 - .book(ボイジャー)、 XMDF(シャープ)

参考 電子書籍の端末

- パソコン

- スマートフォン

- タブレット

ipad、ネクサス等のアンドロイド系タブレット

- 専用端末(各社10万冊程度)

kindle(Amazon) Kobo(楽天)

BookLive Lideo(凸版印刷)

* 各社ともタブレット等からも利用可能

韓国や米国との比較

■米国 公共図書館 9,226館

- ・各館はICTを重視、図書館内でのネット利用が進んでいる。
- ・提供が1万5千館(すべての図書館種で)
- ・ニューヨーク市は1000台のパソコンを図書館に設置

■韓国 公共図書館 800館

- ・内、電子書籍サービス434館が実施

公立図書館での提供は

■公立図書館 17館(実験館も入れて)

千代田区立(アイオネ)

堺市、萩市、徳島市、綾川町、大垣市、山梨県立
(図書館流通センター)

有田川(日本ユニシス)

下関市、関市、大阪市(紀伊國屋)

秋田県立、武雄市(独自)

鎌倉市、札幌市、都立、静岡県立(実験)

* 現在検討中 30館

主要電子書籍システムの概要

Lib pro	韓国企業i-NEOが構築
TRC-DL	7000タイトル システム導入費、 プラットフォーム利用料
ネットライブラリー	大学図書館 ライセンスとアクセス権の購入 和書4000点 洋書30万点

出版社と図書館の考え

■ 76%が何らかの形で提供したいと考えている。

■ 10数館程度の実施

■ 学術書、実用書、小説、図鑑等が中心

■ 小説・読み物、地域資料を提供したい。

■ 書籍より高い価格で提供したい。

■ 書籍と同額以下が望ましい

■ 書籍販売の数ヶ月後の提供

■ 書籍と同時期が望ましい

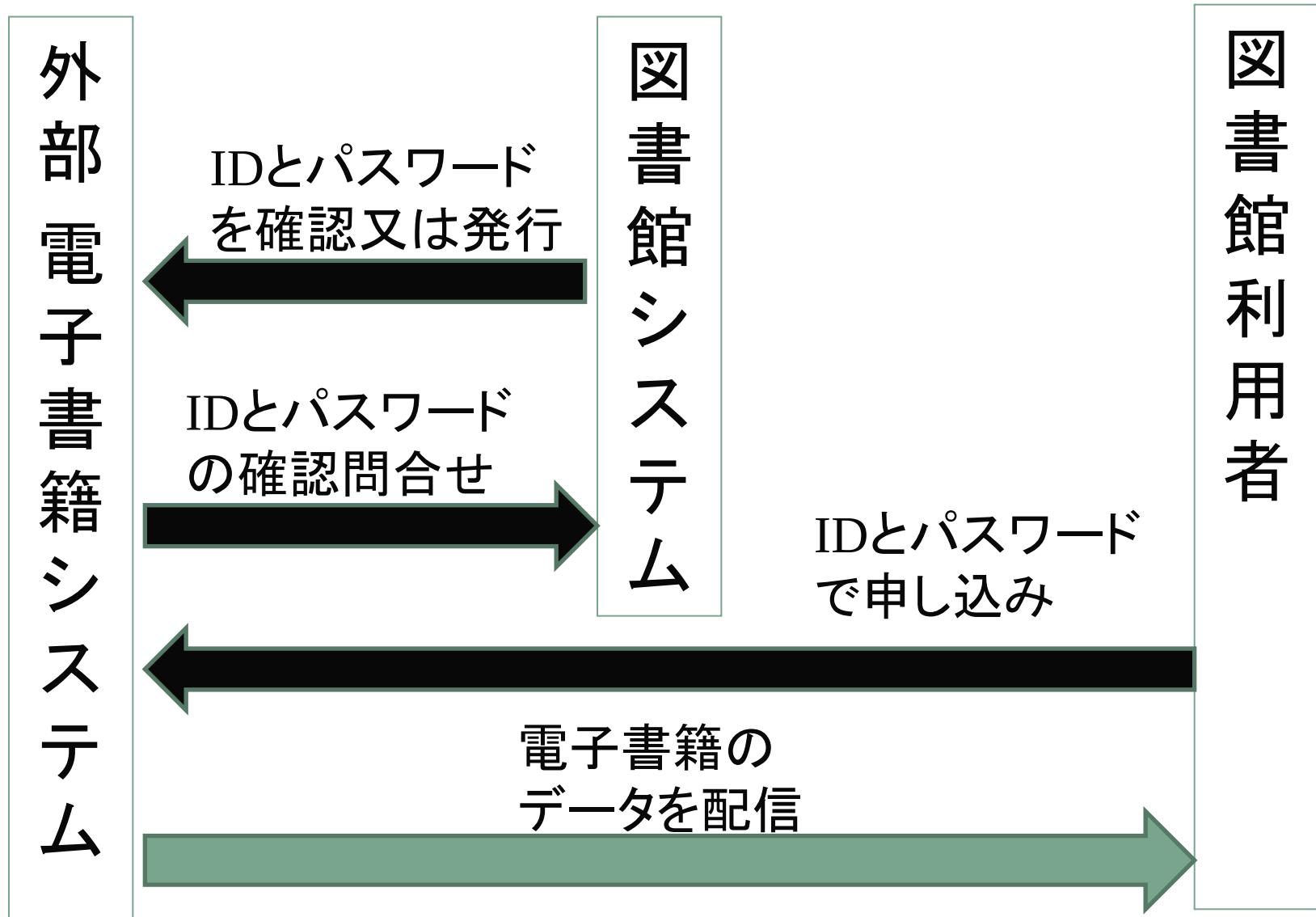
■ DRM等の適切な利用方法の確保

■ 完全なコンセンサスがない状況

図書館における電子書籍の課題

- 電子書籍の提供可能冊数、市場規模
- 出版社との利害調整、ルール作り
- コピー等の法整備
- フォーマットの乱立
- 利用方法のルール作り
- 導入費用と購入価格の設定

電子図書館の認証の仕組み



トップ

経葉ライブラリ

電子図書一覧

全図書検索

雑誌図書検索

カート

電子図書一覧

雑誌名



[サンプル] 週刊ダイヤモンド



月刊歴史読本



紫禁城



プレジデント



近畿文化



陽光 (モノクロ2値サンプル)



モーターファン



同盟写真特報

書籍



赵孟頫前后赤壁赋



王羲之《快雪时晴帖》



书法碑帖·原拓精印·晋·王羲之之书圣教序



中国珍品典藏 中国商业老海报 第1集



简明中国历史地图集



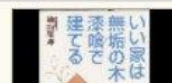
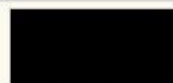
中国珍品典藏 中国火柴老贴画 20世纪90年代



中国电影老海报 20世纪50年代



清明上河图 永青蔚县剪纸





月刊歴史読本 2001(平成13)年4月号 【借受中】

出版者：新人物往来社

発行年月日：2001年4月1日

本文を読む

お気に入りに追加

目次

[〔表紙〕特集 戦国の常識・非常識 最新研究によって見えてきた戦国時代の真実の姿](#)

[全国 戦国大名の新事実・新常識【東北】](#)

[南部・津軽家 本田伸 南部家と津軽家の間には、密接な繋がりがあった！](#)

[伊達家 齋藤潤 義姫出奔は政宗毒殺未遂事件の直後ではなかった！](#)

[最上家 片桐繁雄 最上義光を民衆を愛した名君だった！](#)

[葦名家 高橋充 葦名盛氏は医学にも明るい文人大名だった！](#)

[全国 戦国大名の新事実・新常識【関東】](#)

[上杉家 黒田基樹 扇谷上杉氏は関東管領ではなかった！](#)

[北条家 家永遵嗣 北条早雲は「下剋上の雄」ではなかった！](#)

[里見家 滝川恒昭 天文の内乱は改竄された家督争いだった！](#)

[佐竹家 佐々木倫朗 小田城攻略の背後には、上杉謙信の存在があった！](#)

[全国 戦国大名の新事実・新常識【中部】](#)

[長尾家 竹田和夫 長尾景虎の越後は多様な仏神の信仰世界だった！](#)

[武田家 堀内亨 武田義信擁立による「信玄打倒計画」は実在した！](#)

[真田家 平山優 真田幸隆の実名は「幸綱」だった！](#)

[斎藤家 土山公仁 織田信長の茶数寄は道三譲りだった！](#)

[朝倉家 佐藤圭 義景滅亡後に朝倉家再興計画が存在した！](#)

[全国 戦国大名の新事実・新常識【近畿】](#)

[浅井家 太田浩司 長政の“信長離反”の原因は朝倉との「旧縁」ではなかった！](#)

[松永家 小谷利明 松永久秀による将軍暗殺の伏線は教興寺合戦にあった！](#)

[六角家 奥村徹也 「六角氏式目」には前「六角氏式目」が存在した！](#)

[全国 戦国大名の新事実・新常識【中国・四国】](#)

メニュー

経葉ライブラリ

編集

借受中 (31冊)



2012/10/20



2012/10/20



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



2012/10/19



受取手続中...

2012/10/19

歴史読本

書き換えられた戦国時代の謎

特集
ワイド **新視点 戦国武将** 近年の新説と研究成果

特集
検証 **戦国城郭 10大発見!**

特集
評伝 **物語 戦国の「良妻賢母」**

目次

この本について

〔表紙〕書き換えられた 戦国時代の謎

特集史論

戦国時代史研究 最前線 小和田哲男

特集ワイド〈1〉

新視点 戦国武将〔近年の新説と研究成果〕

織田信長研究 最前線 谷口克広

武田信玄研究 最前線 柴辻俊六

北条早雲研究 最前線 黒田基樹

上杉謙信研究 最前線 花ヶ前 盛明

島津義弘研究 最前線 三木靖

伊達政宗研究 最前線 渡邊洋一

毛利元就研究 最前線 柴原直樹

真田幸村研究 最前線 原田和彦

特集ワイド〈2〉





織田信長（長興寺所蔵）



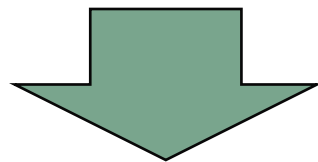
織田信長に関する 新説・新解釈の概要

信長に関する研究の中で近年最も目を引くのは本能寺の変についての論考だろう。一九九〇年代から始まった学問的レベルの高い黒幕説論争は、二十一世紀にずれこんで次々と単行本が出されることにより、別な局面を迎えた。今後、さらに激しい論争が期待されるテーマだが、詳しい解説については「本能寺の変『異説・新説』総合ガイド」に譲ることにする。

次には、信長の合戦に関する論考

図書館における電子書籍の展望

- 新しいコンテンツが提供されるのでは
- 古い資料にもう一度光りが当てられる。
- 来館困難者に対してのサービス
- 新しい利用者が生まれる。



出版社と図書館が協同する機会が生まれる。